

「幻住庵記」の内面叙述（上）

濱 森太郎

一 はじめに

筆者は紀行文『奥の細道』の完成でピークを迎える松尾芭蕉の最盛期を元禄三年（一六九〇）四月の「幻住庵」滞在に始まると見ている。この元禄三年四月以降、松尾芭蕉は継続して京都の俳人たちの信任にふさわしい作品を書く必要に迫られるからである。瀬田川のほとり、国分山という「京ちかき」場所に宿りを得たことは彼の幸運だった。新参ながら歳旦帳を発行し「都の俳諧師」として処遇される晴れがましい立場に立ったことも気分を引き立てた。また松尾芭蕉を取り巻く去来・凡兆・乙州・曲水らの明敏な句作活動からも大きな刺激を受けた。「行春を近江の人とおしみける」（猿蓑）その他、調子の高い名吟もこの時期になった。ただしこの時期に費やされる盛大な創作欲の大部分は『奥の細道』の旅の経験によってもたらされたものである。

この庵住期の代表作とされる「幻住庵記」は、第一稿（冒頭部断簡）まで含めると都合五回の推敲を経て面目を一新し、『猿蓑』版「幻住庵記」として誕生する^{注1}。繰り返される推敲は、都の俳人たちの信任を得るための努力に相違ないが、すべての推敲がそうであるように、文書の信憑性はそこに伝えられる内容だけでなく、それを成立させる書き手のあり方にも左右される。誰に向かい何を意図していかなる結構の感懐を綴るかという、この一文が内蔵するストラテジ並びにモダリティーの

分析が欠かせない所以である。そのストラテジとモダリティーの解明を進めることで、松尾芭蕉の「完熟」の有り様をつぶさに検討することがこの小論の目的である。

二 入庵する夏

元禄三年（一六九〇）春、短期間の京都滞在中にも関わらず、松尾芭蕉は「この京都に作者と呼ぶべき男が居ない。^{注2}」と弟子たちと語り合っ
て過ごした。元禄三年春、京都で発行した歳旦帳に自信を持って掲載した「薦を着て誰人います花のはる」（其俗）は悪評を以て迎えられた。京俳人の師弟関係、「句会」と社交、そこで創作される俳諧・俳文、いずれを取り上げて見ても、京都俳壇には不満が残る。「京都俳諧師（中略）俳諧ざたびつしりと蛭に塩かけたる様に候」（元禄七年六月三日、猪平衛宛芭蕉書簡）と身動きならぬ京都俳壇の現状を酷評するのは、彼が再度上京する元禄七年六月のことである。そのとき彼は江戸留守居の猪平衛に宛てて「ケ様の処、唯実^{ただじつ}を勤めざる故と合点を致、むざとしたる出会・会等、心持有るべき旨、桃隣へ御物がたり成さるべく候」と注告している（レ点は書き下した）。この状況に疑義を感じず「むざとしたる出会」に終始して「実を勤め」ない京都の俳諧師たちには期待できない。こうして松尾芭蕉は是非を問わず、彼に見えているものについて語

り始める。

「幻住庵記」に登場する俳諧の「師匠」は、投句を募り、添削して料金を取り、景品を配って又の投句を勧誘する世間師のような宗匠の対局にいる。彼は浮き世を厭い回国修行に明け暮れる風流人である。「京ちかきところ」に滞在して「庵」を結んでいる。よわい五〇、蝸牛の家を離れるごとく哀れにも世間を出離してすでに十年、鳩鳥が宿る湖水の芦の間に隠れるように俗世間に宿っている。彼は中国の隠士、徐老や王翁を気取り、昼寝する「山民」に習い、時折「猿の腰掛け」から愉快に俗世間を遠望する。その姿が土峯に似た「三上山」、黒津の里、勢田の唐橋、膳所の城と、俗世間は箱庭のように小さく眺められる。

彼が住む「庵」は膳所に住む弟子、菅沼曲水の周旋による。ここに住む宗匠は決まった仕事を持たず、彼の生計は訪問者たちからの「喜捨」で賄われる。入庵早々に「干瓢、筆」を贈る高橋喜平衛（元禄三年四月八日、十日付、芭蕉書簡）、「小提灯、蠟燭」を贈る酒堂（元禄三年四月十六日付、芭蕉書簡）、「打紙、短尺、たばこ、げた」を届ける珍夕（元禄三年六月二十六日付、芭蕉書簡）、「茶」を言付けた正秀（元禄三年七月十日付、芭蕉書簡）など、細やかな心遣いの喜捨に囲まれて「庵も賜物、富貴に候」（元禄三年四月一六日付、芭蕉書簡）と冗談交じりに書くほど暮らしは潤っている。句会の中で宗匠と弟子たちとをつなぐ「束脩（学費）」の定めはない。このため会席に届けられた句文は添削されない。「武江の桃青、今は粟津の辺に住みて、世の俳諧を批判（加点）せずとなん^注」。（元禄三年八月自序、歩雲子編『俳諧物見車』）と宣伝されていた。恐らく来訪者の句文は唱和の形で一座に披露され、談笑のかたちで賞味されただろう。この談笑の場を賑わす実地的な「力」がその句の力量と見なされるのである。

この宗匠は「喜捨」に対する「報酬」として、俳諧に関わる疑問に答え、技法を伝授することがある。彼によれば「兎が豆ばたに通う」「猪が稲を食らう」と語る農夫の農談はすでに俳諧である。ひょこひょこと豆の蔓を分ける兎の足取り、鼻先に汗をたらして稲をむさばる猪の面付きには、憎めない愛嬌がある。無から有を生じることく結実する植物の花実、巧みを尽くして餌をあさる動物の狡知に、手で触るような質感のある言葉を与えること。その表現技術の精細を探る庵住生活に感化された弟子たちは、師匠の足下に挨拶の一句を献呈して風交の実を挙げる。彼らの社交が「風交」と呼ばれるのは、彼らが句文の贈答を通じて新しい俳諧人の風韻を運ぶからである。

「辛桃」を自称する松尾芭蕉はそういう風交を通じて京師の俳諧を観察し、彼らと自己とを隔てる隔壁の性質を検分する。そしてその上で隔壁を超越する文体や技法を模索する。その模索が終了したときに、松尾芭蕉に「完熟」の契機がもたらされるからである。

三 採用された「記」の書式

この時期に書かれ、『奥の細道』と並び称される「幻住庵記」が、叙事四段の後に議論一段を以て一文を結ぶ「記」の書式で書かれたことはよく知られている（白石悌三『日本古典文学大事典』『幻住庵記』岩波書店刊^注）。叙述の大部分を占める叙事四段は「庵の所在と名称の由来」「入庵の経緯」「庵からの眺望」「庵住生活」の叙事であり、議論一段は「所感」「人生観」の表明と理解される。叙事四段は一般読者に庵住生活の成り立ち並びに仕組みに即してその輪郭を語り、議論一章は、その妙味を伝えるために語り手が開陳する「庵住の所感」である。その「所感」の中で

表明される人生観は、「幻住庵」の生活世界を支える支柱となる。一鉢即生涯、縁に随いて歳華を渡る（『詩人玉屑』）ことを指針とする隠遁者の感覚に適う出来事や光景が「庵の所在と名称の由来」「入庵の経緯」「庵からの眺望」「庵住生活」「生活所感」の五点に集約されて「庵住世界」を構成する。

ただしこの分析は『猿蓑』所収の「幻住庵記」（第五稿）を対象にしたもので、第四稿の「幻住庵記」には該当しない。これをやや仔細に言えば、初稿断簡（真筆、冒頭部のみ）第二稿「幻住庵の記」（写本『芭蕉翁手鏡』）、第三稿「幻住庵記」（『芭蕉文考』所収）、第四稿「国分山幻住庵記」（卷子本「元禄三初秋日」、真蹟二本伝存する^{注6}）、第五稿「幻住庵記」（猿蓑版（真筆二本伝存する^{注6}））の序列で書き継がれた「幻住庵記」のうち、第四稿の「国分山幻住庵記」だけは、通常の「記」の様式からはみ出す書式で書かれているのである。

まずは第三稿から第四稿にいたる本文の添削過程で加えられた大きな異同を整理すると、以下の通りである（詳細については後に検討する）。①章段の配列は、前者が1「庵の所在と名称の由来」、2「庵からの眺望」、3「庵住生活」、4「庵住の所感」の四段構成であるのに対して、後者は1「入庵の経緯」、2「庵の所在と名称の由来」、3「庵からの眺望」、4「庵住生活」、5「庵住の所感」の五段構成となっている。②後者で新規に追加された1「入庵の経緯」を語る叙述の中に語り手の人生の述懐が多量に補入されて、「所感」「叙事」「所感」という風変わりな書式ができている。

③2「庵の所在と名称の由来」の叙述では、菅沼曲水の斡旋で入庵する次第を語る「庵の名称の由来」の末尾に「まことに知覚迷倒、みなこれ幻の一字に帰して」云々と語り手の「人生観」の述懐が追加されている。

④3「庵からの眺望」では、「比えの山」「比良の高根」など「幻住庵」を包む琵琶湖周辺の生活空間を大観する前者に対して、後者では「山はさすがに深からず。」以下、「幻住庵」周辺の野草の開花や野鳥の鳴き声を加えて庵住生活の豊かな滋味を精細に演出している。

⑤同じく3「庵からの眺望」では、前者が山上に設けた「猿の腰掛」から眺めた琵琶湖周辺の華やかな風景を描くのに対して、後者は同じ琵琶湖周辺の風景を「幻住庵」から眺めたパノラマとして紹介している。また、後者では叙述対象の精細さに加えて「かさとり山に笠はなくて、黒津の里人の色や黒かりけむとおかし」など、語り手の愉快な感想を追加している。

⑥4「庵住生活」では、「猿の腰掛」から見た琵琶湖周辺の風景叙述が華やきを添える前者に対して、後者は黄山谷の詩句に登場する「除老が海棠^{注7}菓上の飲楽」「王道人が主薄^{注8}峰の庵」を追加して、それさえ凌駕する「幻住庵」の醍醐味を語っている。

⑦同じく4「庵住生活」では、前者で「水汲（み）、茶を煮る」と記された里の年寄り、神主らが、後者では作物を食い荒らす「猪・兎」の仕業を語る楽しい農談の語り手に書換えられている。

⑧5「庵住の所感」では、我が身の不甲斐なさを恥じ「覚えず初秋半に過ぬ……一生の終りもこれにおなじく夢のごとくにして、又々幻住なるべし。」と結ばれる前者に替って、後者は「労して功むなく……頓て立出でてさりぬ。」と草庵退去の弁で結ばれている。

以上、要するに「幻住庵記」第四稿は「記」の形式で執筆された第三稿を踏襲して執筆されたが、その踏襲の際に苦桃に近い我が身の行路難を語って一章とする「入庵の経過」が挿入された。また2「庵の所在と名称の由来」では「みなこれ幻の一字に帰して」云々と、語り手の「人

生観」が新規に挿入され、3「庵からの眺望」では「幻住庵」を包む生活空間に野草や野鳥の生態を追加して庵住生活の豊かな自然を詳述する一方、「幻住庵」から見た琵琶湖周辺の景色を眺めるときには、「かさとり山に笠はなくて、黒津の里人の色や黒かりけむとおかし」とわざわざ駄洒落に似た感想を披露する。同じく4「庵住生活」では、「徐老が海棠棠上の飲楽」「王道人が主簿峰の庵」を凌駕する庵住の妙味が挿入され、作物を食い荒らす「猪・兎」の仕業を語る農談の楽しみが追加されている。そして最期に5「庵住の所感」では、我が身の不甲斐なさを侘びる語句に続いて「勞して功むなく……頓て立出でてさりぬ。」と草庵退去の弁を挿入して一文を結んでいる。

こうした語句の挿入によって第四稿「幻住庵記」は、1「入庵の経緯」、2「庵の所在と名称の由来」、3「庵からの眺望」、4「庵住生活」、5「庵住の所感」の五章を以て、元禄三年初夏の入庵から元禄三年初秋の退去に至る庵住生活の内面の働きを大きく披露する文章へと様変わりする。この変更後の文章の書式は、各務支考編『和漢文藻』（橘屋治兵衛版、享保二二年刊）に収録された同文のタイトル「幻住庵ノ賦」にちなんで「賦」と呼ぶことが出来るだろう。語り手の感想を自在に織り込むことが出来る「賦」の書式であれば、第一に語り手の人生観や所感を述べる内面叙述によって、叙述そのものに愉快な情味を加え、第二に「幻住庵」の生活を的確、細密に語って叙事に新鮮な厚みを加えることができるのである。

五 第五稿「幻住庵記」の添削動機

ところがそうした自己の思案を盛り込んだ「幻住庵記」を京都の弟子

向井去来に送付した松尾芭蕉は、去来からかなり厳しい批判を受けることになる。榮えある芭蕉一門の代表撰集を編集する積もりでいる向井去来は、かなりストイックな文章観の持ち主だったと見える。ここに、第四稿の「幻住庵記」と猿蓑版「幻住庵記」とを照合した結果を整理すると、次の五点となる。

①前者では1「入庵の経緯」、2「庵の所在と名称の由来」、3「庵からの眺望」、4「庵住生活」の順に配列されていた叙事四段の配列が、後者では2「庵の所在と名称の由来」、1「入庵の経緯」、3「庵からの眺望」、4「庵住生活」と、「記」の書式にふさわしく再配列された。

②1「入庵の経緯」を語る叙述の中に多量に含まれていた人生雑感から、拙い我が身を侘びる苦い述懐の語句が切除された。

③2「庵の所在と名称の由来」では、簡略化されていた「庵の所在」の叙述が当地の地形に即して丁寧に補筆され、替わりに「まことに知覚迷倒、みなこれ幻の一字に帰して」云々とあった語り手の「人生観」は切除された。

④3「庵からの眺望」では、前者が「膳所の城・勢田の唐橋・粟津の松原」と美景を次々に焦点化して連結する印象描写であるのに対して、後者は「城あり、橋あり、釣たる、舟あり」と景観を遠近に即して点描する客観描写に変わっている。

⑤5「庵住の所感」では、前者が「初秋半に過行風景、朝暮の変化もまた是幻の栖なるべしと、頓て立出てさりぬ」と退去の弁で結ばれるのに対して、後者は「先たのむ椎の木も有夏木立」と庵住初発の挨拶句で結ばれる。

以上、要するに前者第四稿で新規に追加された叙述の大部分は、第五

稿に引き継がれて再利用されるが、1「入庵の経緯」を語る叙述は、「幻住庵記」の冒頭から次席に格下げされ、中に含まれた人生の雑感からは苦い自意識の陳述が切除された。2「庵の所在と名称の由来」の叙述は「記」にふさわしく冒頭部に復活され、「庵の所在」が当地の地理を踏まえて丁寧に補強された。また眺望の楽しみを語る3「庵からの眺望」の叙述は野草や野鳥の生態を加えて細部の厚みを増し、語り手の感想の披露は押さえられた。三上山、黒津の里、膳所の城、勢田の橋、粟津の松原と美景を堪能する彼は、その感激を落ち着いた口調で端正に語り始める。また「勞して功むなしく……頓て立出でてさりぬ。」と退きの弁で結ばれていた5「庵住の所感」は「賢愚文質のひとしからざるも、いづれか幻の栖ならずやと、おもひ捨てふしぬ。」「先たのむ椎の木も有夏木立」と入庵に伴う諸方への挨拶句で結ばれる。こうして「幻住庵記」第五稿の叙述は、2「庵の所在と名称の由来」、1「入庵の経緯」、3「庵からの眺望」、4「庵住生活」、5「庵住の所感」と第三稿の「記」の書式に復帰し、元禄三年初夏の入庵初発の語り手の感懐を綴る文章に編成されたのである。

念のためにこれを第四稿「幻住庵記」を基点にして言い換えれば、さながら琵琶湖湖畔の風光の紹介者よろしく、三上山、黒津の里、膳所の城、勢田の橋に沈む夕日の美しい眺め、その楽しみを嬉々として語る語り手の感興の起伏は抑制された。また長く、苦い自意識を持ち続け、諸国を流浪した末に門人たちの好意で「幻住庵」の生活に辿り着いたにも関わらず、その四ヶ月後には「朝暮の変化もまた是幻の栖なるべしと、頓て立出てさりぬ」と、そそくさと退きの弁を披露する、幾分放縱な放浪者の心内叙述は切り捨てられた。この心内叙述の重要さにこだわりを持ち続ける松尾芭蕉が後日、何をしたかは後に述べるので、ここでは省

筆する。

ちなみに冒頭部のみが断簡として伝わる第一稿を除けば、第二稿、第三稿はともに、叙事四段のうち1「入庵の経緯」を欠き、「是幻の栖なるべしと、頓て立出てさりぬ」という「所感―退きの弁」の叙述を欠いている。このため第二稿・第三稿はかえって素直に「記」の書式で執筆された作品と見なすことができる。

ではその庵住生活のあれこれを細かに述懐する第四稿は、なぜわざわざ書かれるのか。それに適切に答えるためには、さらに一歩後退した地点からこの第四稿の「国分山幻住庵記」を分析して見る必要がある。

六 「苦桃」の内心を描くこと

さて元禄三年四月の入庵から元禄三年七月の退去に至る庵住生活の感懐を綴る文章という先の要約には、実のところ肝心なことが一つ欠けている。誰が何のために誰に向かっていかなる結構の感懐を綴るかという、この一文がもつストラテジとモダリティーの分析が欠けているのである。

この第四稿「幻住庵記」の語り手の名を、筆者は仮に名付けて「風羅坊」と呼ぶ。「風羅坊」は芭蕉庵桃青が胸中に住まう風雅の魔神に命名した名称である。元禄二年の奥羽行脚に当たっては、大きな騷擾を抱え持った旅僧の俳号として曾良の『随行日記』に記録され、この時期編集が始まる『俳諧勸進帳』（路通編）では芭蕉庵桃青に替わる新しい俳号として正式に登場する。生来「辛桃」のごとき性情に妨げられて、係累の縁を離れ、仕官、出家の営みを疎かにし、将（た）また去年の夏（元禄二年）は奥羽巡礼に精魂を消耗して、今、水鳥のごとく琵琶湖の水辺に宿りを求める。どうやら内向質であるらしい彼は、立身を果たさず、生業を疎

かして諸国を流浪する我が身の来し方を次のように述懐する。「何ぞや、法をも修せず、俗をもつとめず、いとわかき時よりよこざまにすける事侍りて（中略）、終に此一すちにつながれて、無能無才を恥るのみ。」（真蹟卷子本）人生の蹉跎を抛り所にした深い内省の視点で眺められた苦しい処世や胸中でわだかまる嘆きこそ、このテキストの述懐を生み出す要因なのである。

このやや放縦にしていかがわしい身上に触れる述懐の聞き手は、かなり限定されている。この初稿以下の文書が卷子本形式で豪華に装丁されていることから見て、読者は風羅坊の警咳に接したことのある少数の支持者たちに限られる。彼らは「辛桃」のごとき身上が風羅坊の特徴であることを承知する人々、言い換えれば「辛桃」らしい騷擾のせいで、風羅坊が眺める身辺雑事が時に微細な金色の光子を帯びて輝くことを承知する人々である。

また、2「庵の所在と名称の由来」では、菅沼曲水の幹旋で入庵する経過が丁寧な語られ、「庵の所在」を示す地理的説明は簡素になって省筆されている。このため国分山近辺の地理に通じた読者でなければ、その庵を中心に岩間山、石山、瀬田川、黒津の里、田上山、三上山を適切に配置して「幻住庵世界」を意識の中に再構成することはできない。また「くまなき」眺望を獲得した後に語られる「比えの山」「ひらの高ね」「辛崎の松」「膳所の城」「勢田の橋」、夕日を残す「粟津の松原」をそれぞれ図像的に想起することもできない。内省的な視点から自分と外在世界とを記述する立場に立てば、国分山を取り巻く実際の地形の説明は二義的なものになるのである。

その替わりにここで際立つことは、何事も「幻の栖」の出来事なりとする語り手の述懐の深さである。そのせいもあって、湖水の眺望を独占

することの愉悦やこの庵住生活を準備してくれた支援者たちの好意を頼むことも、心中に兆した迷妄の至りと見なされている。北条団水編『特牛』（元禄三年十月十四日自奥）で「今や俳隠逸の芭蕉翁あり」と伝えられるとおり、松尾芭蕉は傍目にも「俳隠逸」と映っていた。つまるところ俳隠逸の生計は、奢侈や蓄財とは無縁となり、その無一物の生活は「幻住」の感慨を促進する。そしてその無一物と表裏を成す「幻住」の感懐に支えられた第四稿「幻住庵記」は、幻住生活のあれこれに触発されて生じる予の「一念一動」（松尾芭蕉著「野ざらし紀行」跋）を綴った記録となるのである。

これをやや丁寧に言えば、第四稿「幻住庵記」で松尾芭蕉が試みたことは、蕉門の同行者に精神の内側を開示することである。その際、「一鉢即境涯」という行脚の心得や朝夕の変化を幻とみる無常観の認識枠で開示される語り手の内面は、すでに承認済みの社会規範である。大きく立身を試みて夢破れ、僧房に入らんとして果たせなかった過去の経歴もまた同じである。松尾芭蕉のごとく無足人の家庭から立身を目指す青年が状況に適応するために形成した制度的な内面は、個人が生活経験を通じて社会規範に対応しながら形成する「精神の皮質」に相当する。

ただしその経験が「苦桃」として結実し、蝸牛が殻を失い、蓑虫が蓑を離れて侘びしい流浪生活に踏み迷うときの苦勞を綴るとなると、これは傾聴に値する。「夜座静にして影を伴ひ、罔両に是非をこらす」ような思索や「虚無に眼をひらき、羸顔に虱を捫て座す」ところの行住座臥もまた、内省に集中する語り手の特異な心性を照らし出す叙述となる。個人が自然環境や社会組織に反応しながら形成する精神の内質（メンタリティー）を開示することになるからである。そういう精神の内質（メンタリティー）が人間の面白さを描く上で欠かせない領域であることは

言うまでもあるまい。ここには、後に人間の内質を描いて人生の尽きせぬ魅力を開示し、大衆を魅了する近代文学の入口が開けているのである。無芸無才を一際深く恥じ入る語り手は、「たましゐつかれ、まゆをしかめ」た末に、これまで語り継いできた庵住生活を「幻の栖也」と総括してそそくさと退去する。「一鉢即境涯」を実践する隠遁者の暮らしの中には、後の形見となる物はほとんど残らない。見すばらしく苦々しい「苦桃」（毛桃・石桃とも言う。実は小さくて堅く酸渋で苦い）を身上とする苦い述懐に突き動かされるこの一文は、「庵の名称」を語りつつ菅沼曲水への謝意を表し、「庵からの眺望」を綴りつつ眺望を占有する喜びを伝え、「庵住生活」の楽しみを語りつつ「朝暮の変化もまた是幻の栖なるべし」と退去の心情を語って退場する内省的な文章となる。そしてそれゆえこの一文は「後みん人の記念となれ」（第四稿「幻住庵記」）かしく切望して書かれた予の心からの謝意を届ける文章となるのである。

七 古典的形式の採用

庵住生活のあれこれに触発されて生成する「一念一動」（「野ざらし紀行」跋）を記録することは、内面の変化を凝視する松尾芭蕉の個性に根ざした原理的な作文技法である。自己の処女紀行文の完成に当たって「必（ず）記行の式にあらず」（「野ざらし紀行」跋）と断りする松尾芭蕉は、晩年に至っても阿仏尼の『更級日記』を引き合いに、追従するばかりでその旧弊を改める事ができない俗流の紀行文を批判し、「そこに松有かしこに何と云川流れたりなどいふ事、たれたれもいふべく覺侍れども、黄哥（奇）蘇新のたぐひにあらずば云事なかれ。」（爰の小文）と警鐘を鳴らす「苦桃」である。たとえば近世を代表する「文学」だった漢詩文

の作者がやるように、出典に依存した語彙を連ねて一文を成すことなど論外に当たる。彼は古文に追従して書かれる古典的な文章が実事からかけ離れた語彙で綴られることを警戒している。

語り手の「一念一動」、すなわち外界から受け取った実感の波動を的確に言語に換える彼の文章技法は、この後、『奥の細道』に至って、次のように大きく開花する。

三代の榮耀一睡の中にして、大門の跡ハ一里こなたに有。秀衡が跡ハ田野に成て、金鶏山のミ形を残す。先高館にのほれば、北上川南部より流るゝ大河也。衣川ハ和泉が城をめぐりて、高館の下にて大河に落入。康衡等が旧跡ハ衣が關を隔て、南部口をさし堅め、夷をふせぐとみえたり。偕も義臣すぐつて此城にこもり、功名一時の叢となる。國破れて山河あり、城春にして草青みたりと、笠打敷て時のうつるまで泪を落し侍りぬ。（『奥の細道』「平泉」）

ここに言う「一睡の中にして」は「一睡の夢の中にして」の意で、典拠は李泌の『枕中記』（または謡曲「邯鄲」とされる。だがその出典に言う「いっすい」は「何事も一炊の夢」（謡曲「邯鄲」）の「一炊」、すなわち粥が一煮立ちする間に貧書生が見た栄華と没落の夢を踏まえている。また「國破れて山河あり、城春にして草青みたり」の出典は杜甫作「春望」であり、実際の語句は「國破れて山河あり、城春にして草木深し」である。したがって「一睡」は「一炊」、「草青みたり」は「草木深し」の引用ミスとなる。

肝腎の愁嘆場で発覚するかかる引用ミスは否応なく読者の微笑を引き起こすが、それは一時的なことに止まる。一文を支配する語り手の感情の波動は勇壮にして力強く、このため、はきはきとして勇壮な口述の流れは絶え間なく文脈を支配する。人の世の栄枯盛衰に深く涙し、一刻

近く古戦場に座り込んで泣き続ける主従の上を一時的に微苦笑の残響が経過してしまうと、文脈はふたたび元の力強いリズムに支配される。そして「時のうつるまで泪を落」すような深い愁嘆の情緒は、適切な振幅ですつきりと読者に伝達される。このテクストに呼び込まれた読者は、跡形もなく消滅した壮大な栄華の跡に驚愕する予の視線に導かれて、その驚愕を語る予の言葉の引用ミスに苦笑し、その場に座り込んで泣する予の心底にほろりとする。それは古典落語の語りのように読者の微苦笑を誘いつつ、結びになるとほんのりした気分を呼び戻す「揺らぎを持った」大胆な語りなのである。

この時期、大津の愛弟子、浜田珍夕は『ひさこ』の編集を進めている（元禄三年六月、越智越人序、元禄三年八月一三日刊）。京都在住の向井去来は『猿蓑』の編集に取り掛かっている。去来からの要望に応じて送付された「幻住庵記」（第四稿^{注4}）には、去来の意見が添付されて送り返されてくる。現存する書簡は、向井去来の意見を踏まえて書かれた松尾芭蕉の返信（元禄三年八月上旬、向井去来宛芭蕉書簡）である。

1 発端行脚の事を云て、幻住庵のうとき由、難至極。陳而曰（く）、蝸牛・蓑虫の栖を離（る）と云て、行衛なき方、流勞無住終に一庵を得る心なれば、前段行脚共に皆、居所にかかり候。（中略）愚非聊（か）のがるる処有といへども幻住庵にかかる所、はきはきとなくて、御一覽の所、尤（も）と同ズ。則（ち）前後の文章ませ合（せ）、此の如くにつづり候。（元禄三年八月中旬、向井去来宛芭蕉書簡、以下同じ。レ点は読み下した。以下同じ。）

2 空山・屏顔^{きんがん}、心相違いかか御座有るべく候や。但シ胸中の空山たるべく候間、くるしかるまじくや。

3 除老・王翁が事は山谷の口の方に之有るかと覚（え）申（し）候。

一連の詩に二人の名をとる事無念に候。

4 我が聞（き）しらぬ咄に日をくらす、朱文公の「農談日西^{にしにす}」と云（ふ）句の心にて書（き）申（し）候へ共、直（ち）に農談の二字を書（き）改（め）候。いかがにや。

5 頓て立出てさりぬ、難至極。仍（て）、筆の一字を書そへ候。

6 国分山に取（り）付（く）処、いま少しよろしく風流あるべく候。此処御工夫忝かるべく候。此度の文章少（し）落（ち）付（き）たる様に愚意にも存せられ候。（（ ）内は筆者の補筆）

この文面6の末尾に「此度の文章少（し）落（ち）付（き）たる様に愚意にも存せられ候。」とあるとおり、松尾芭蕉は向井去来の意見を斟酌して「幻住庵記」の文面を修正し、その修正原稿について、再度、去来の意見を求めたものである。したがって二人の間で往復した「幻住庵記」は二点（幻住庵記1、幻住庵記2）有り、芭蕉書簡に言う「此度の文章」は後者を指すものである。

次に、先に去来に送られた「幻住庵記」は、1「発端に行脚の事」を書き、次に幻住庵の佇まいに言及する書き出しを採り、2「空山・屏顔」並びに、3「徐老・王翁」、4「我が聞（き）しらぬ咄に日をくらす」、5「頓て立出てさりぬ」の語句を含む文章である。そしてその条件を満たす「幻住庵記」は第四稿以外にはない。このため従来から、先に去来に送られた「幻住庵記」（すなわち「幻住庵記244」または「同245^{注8}」）は今栄蔵氏が言う「第四稿」だと推定されてきた。

ただし、「初秋半に過行風景、朝暮の変化もまた是幻の栖なるべしと、頓て立出てさりぬ」（幻住庵記244）、「初秋半に過行風景、朝暮の変化のまた是幻のすみかなるべしと、やがて立出てさりぬ」（幻住庵記245）と有る結びの語句には「頓て立出てさりぬ、難至極。仍て、筆の一字を書（き）

そへ候。」に該当する訂正箇所が見あたらない。

同様に、1「発端行脚の事を云て、幻住庵のうとき由、（中略）則（ち）前後の文章ませ合（せ）、此の如くにつづり候。」は、新規に送付した「幻住庵記2」に関わる語句、2「空山・屏顔、心相違いか御座有るべく候や。」は「屏顔に足を投出し、空山に虱を捫て座ス」（定稿系、幻住庵記²⁴⁷）とある新規改訂の是非を去来に問う語句である。また4「我が聞（き）しらぬ咄に目をくらす、（中略）直（ち）に農談の二字を書（き）改（め）候。」は、第四稿の語句を修正して「我聞（き）しらぬ農談、日既（に）山の端にかゝれば」（定稿系、幻住庵記²⁴⁷）に改めたことを伝えるものである。

ちなみにこの芭蕉書簡で芭蕉が去来に検討を依頼している「幻住庵記2」は、定稿系に近似した物と認められるが、「幻住庵記」定稿本には5「頓て立ち出でてきりぬ、難至極。仍て、筆の一字を書（き）そへ候。」に該当する語句がない。定稿本の末尾は「賢愚文質のひとしからざるも、いづれかまぼろしのすみならずやおもひ捨てふしぬ。」（幻住庵記²⁴⁶）とあり、「筆の一字を書（き）そへ」た形跡がないからである。

とするとこれによって、以下の六つの事実が明らかである。

- 1 松尾芭蕉は先に向井去来に草案の「幻住庵記」第四稿を送ったこと。
- 2 去来がその第四稿の結構自体に疑義を唱えたこと。
- 3 その疑義を受けて松尾芭蕉が「幻住庵記1」（第四稿）の結構を大きく修正したこと。

- 4 松尾芭蕉は修正を済ませた「幻住庵記2」（定稿系）を去来に送って、もう一度彼の意見を求めたこと。

- 5 この修正を通じて、庵住生活のあれこれに触発されて生じる予の「一念一動」（「野ざらし紀行」跋）を記録するという「幻住庵記」の新機軸

は大きく抑制されたこと。

6 現存する定稿本「幻住庵記」二本はいずれも去来に送付された「幻住庵記2」そのものではないこと。
以上である。

八 去来の思惑

改めて言うが、断片である第一稿を除外すると、「幻住庵記」の第二稿、第三稿は「記」の書式で書かれている。すなわち周囲の景観叙述に始まる「叙事」（名称の由来・周辺の地形・庵での生活）に続いて自己の所信を語る「庵住の所感」によって結ばれる書式である。そしてその叙述の様式が変化したところで先の第四稿が書かれている。このとき初めて「幻住庵記」は、庵住者たる松尾芭蕉の感懐、言い換えれば「一念一動」を写すツールに近付いたのである。

その「幻住庵記」を向井去来に送付したのは、去来が『猿蓑』に「幻住庵記」を収録する方針を立てたからに相違ない。また松尾芭蕉と交流を重ねる向井去来には、俳諧における滑稽の在処を「只任ニ心感レ物寫レ興而已矣（ただ心の、物に感じ、興を写するにまかすのみなり）」（『猿蓑』跋）と看破する洞察力を備えている。物に感じて胸中に沸き起こる「興」を手触りのある言葉に替えることができれば、彼らの俳諧は成就する。当然この「幻住庵記」を送付する松尾芭蕉はこの第四稿が『猿蓑』に掲載されることを想定していた。

なるほど一見すれば、個人的な感懐を少なからず盛り込んだ原稿に相違ないが、明敏な去来ならば、その語句が引き起こす「感興の揺らぎ」の重要さに気づくだろう。その感興の中に我が身を置くことで「心の色」

がどこかしら浮き浮きした「愉快モード」に切り替わることに気づけばよいのである。事実、国分山の「幻住庵」跡地に立って睡癖のある山民になりすまし、猿の腰掛や苔清水の跡を巡れば、かつて芭蕉の胸中に満ち満ちた愉快さ、滑稽さは沸々と湧くのである。

だがその種の素朴な愉快さ、滑稽さは、恐らく文章の気品を重視する向井去来の探るところとはならなかった（詳しくは後述）。松尾芭蕉の要望に応じて疑義を伝え始めた向井去来に対して、松尾芭蕉は「少々草臥付（き）申（し）候間、前後の文、先是迄にとどめられ、所々は御加筆くるしからず候間、能々御覧成され候（ひ）て、他のそしりをまめかれ候様に成さるべく候」（元禄三年八月中旬、向井去来宛芭蕉書簡）と書き送る。「前後文章を入れ替える議論はこの程度にとどめて」^{注11}、さらに入念に本文をご点検下さった上で、無用な「他のそしりをまめかれ候様に」ご協力頂きたいと言うのである。

松尾芭蕉は明らかに向井去来が行った「幻住庵記」批判の内、文章の結構の組み替えに関わる議論は避けようとしている。そしてその替わりに去来が今以上に慎重に本文を点検することを期待している。他ならぬ京都で出版される芭蕉一門の句集は、極力「他のそしりをまめかれ候様に」配慮する必要があったからである。

恐らく他のそしりを避けるためであれば、松尾芭蕉は一も二もなく去来の助言を聞き届けるだろう。「少々草臥」^{くたびれ}たという松尾芭蕉の疲労感^{（注12）}は考慮するとしても、議論を避ける原因は「草臥」^{くたびれ}だけではない。

『猿蓑』には「風狂野衲」^{ふうきやうのやなふ}内藤丈艸による次の跋文が掲げられている。元禄元年（一六八八）二七歳で致仕したのち、旧主寺尾家（犬山内藤藩家中）の侍医中村春庵（史邦、京都住）方に身を寄せていた丈艸は、この時期、春庵と同職の去来（仙洞御所勤務）、凡兆らと昵懇になっていた（『繪

合芭蕉辞典」「丈艸」雄山閣刊）。

跋

猿蓑者芭蕉翁滑稽之首諠也
非比彼山寺偷衣朝市頂冠笑
只任心感物写興而已矣洛下
逸人凡兆去来随翁遊學謀館
竹窓躡等凌節斯有歲屬撰此
集玩弄無已自謂絶超狐猿白
裘者也於是四方吟友憧々往

『猿蓑』跋文（部分）

猿蓑者芭蕉翁滑稽之首諠也。
非レ比：彼山寺偷レ衣朝市頂レ冠笑一。

猿蓑ハ芭蕉翁滑稽ノ首諠也。
彼ノ山寺ニ衣ヲ偷マレ、朝市ニ

只任ニ心感レ物寫レ興而已矣。

只心ノ物ニ感ジ興ヲ寫スルニ任
スルノミナリ。

ここにいう「首諠」は首たる景響の意。光と影、音と響きのように密接して速やかに反響する関係を言う。「上に誠有れば、則ち下之れに応ずること、景響のごとし」（荀子、富国）のように用いられる。すなわちこの度、上梓する『猿蓑』は、芭蕉一門が上下こそぞって期待する「滑

稽之首諒^{しきりょう}」である。ただしここに言う滑稽は自他の失態を種にした明け透けな笑いではない。心が物に感じたときに生じる「興」に触発された微苦笑である。俳諧の核心を「興」に見るこの認識は『猿蓑』の編成に従事する編者たちの共通認識であった。このため松尾芭蕉と向井去来との間に大きな認識ギャップがあった訳ではない。「物の微」を描いて深い愉悅に至る松尾芭蕉と、「物の微」に触発された「興」を切り取って垢抜けした手際を見せる『猿蓑』の主張は、それこそ景響の関係にある。彼らは同じ路線上で「幻住庵記」が「記」の叙述形式に適うか否かを詮議しつつ、実は語り手の「一念一動」から発散する微細な「興」の品位を詮索しているのである。

九 上品といふこと

さて、文化芸術を級審する東洋の尺度である「真善美」の規範から言えば、「物の微」を追求した松尾芭蕉の俳諧はさしずめ「真」の文芸に相当する。「習へ」と云は、物に入てその微の顕（れ）て情感するや、句となる所也。（三冊子・赤）と証言する服部土方の証言に照らすと、その真は「物に入」りて自力で発見することが必要な「微」として発現する。

「竹の事は竹に習へ」と言う芭蕉の指示通り、竹の生態系に参入することで初めてその生態の「微」が顕れ、見る者の感興を誘う瞬間に遭遇することが出来る。そしてその「微」、触発されて湧き出る感興の誘因となる「物の微」を丁寧言葉に替えるときに、感興を手触りのある言葉に替えることが出来る。それを指して「誠の俳諧」と呼ぶ松尾芭蕉一門から言えば、傘下の俳人達は各々、感受性を錬磨して己らしい「誠の俳諧」を発見して行けば済むことだった。しかしここ京都では、そうは問屋が卸さなかった。「心の位」「心の色」と表現される俳人達のメンタ

リティーを「上品・中品・下品」と区分けする都会的な感受性が働く土地柄だったからである。

京都の俳諧を捉えて「俳諧さたびつしりと蛭に塩かけたる様に候」と書き、「ケ様の処、唯実を勤めざる故」（元禄七年六月三日、猪平衛宛芭蕉書簡）なりと看破するとしても、弟子の向井去来の作品にその言葉の応酬は通用しない。去来自身は京都で開かれる「むざとしたる出会」（同上、猪平衛宛芭蕉書簡）を避けて松尾芭蕉と対座する男だからである。後にこの向井去来が著述する『去来抄』が「心の位」「心の色」となって顕れる俳人達のメンタリティーを品位の観点から吟味する書物であることを忘れてはならない。

「物の微」を手触りある言葉に替えるだけでは納まらない環境に身を置く松尾芭蕉は「幻住庵記」において、まず「記」の書式を試み、次に「賦」の書式に変更し、さらに両者の特徴を併合した新「記」の書式に適用「幻住庵記」を執筆するが、問題はその書式や文体の先にある。

言うまでもなく幻住庵滞在中の松尾芭蕉が「記」の書式を踏襲することはさほど難しいことではない。木下長嘯子が書き、西山宗因が書いた「記」の書式は、いやしくも俳諧師なら一度は筆を染める書式である。

その馴染みの書式を踏襲することで、内容が定まり、述作にテンポが生まれ、構成は清潔になる。洗練を重視する京都の俳諧師からすれば、大方はそれでよいのだが、その種の俳文は実のところそつなくして退屈である。安易に書式に取り付くことで実のある「幻住庵記」が書き上からないのは、人間の感受性自体が書式に従って整形されてしまうからである。文章の様式性を強く義務つける古典主義の枠内では『奥の細道』や『笈の小文』は書きようがない。松尾芭蕉はこれらの諸作を書き始め、書きさして放置しながらこの事実を嘔みしめるようになる。その中断の

模様は『奥の細道』『笈の小文』の文言が「幻住庵記」のそれと部分的に重複することによって確認することができる。（以下次号）

注

注1 今栄蔵『芭蕉年譜大成』（角川書店刊）二四〇頁～二四三頁、二四六頁～二四九頁、二五〇頁～二五三頁、二五八頁～二六一頁に各作品を掲出する。

注2 「愚句（薦を着て誰人います花の春 真蹟草稿）」の事、随分当年は晴れがましく、京・大津のものの共耳をそろへ、目をそば立て申し候。わらはぬ程の事申し候。（元禄三年 一月五日付、式之・槐市宛芭蕉書簡）と歳旦帳に自信をもって発表した自句が誤解されて非難が生まれた。その非難を話題にした元禄三年四月十日付此筋・千川宛芭蕉書簡には「京の者共は薦被りを引付の巻頭に何事にやと申し候由、あさましく候。例の通り京の作者尽くしたると、沙汰、人々申す事に御座候。」と記されていることによる。

注3 「世の俳諧を批判（加点）せずとなん」における「批判」は、持ち込まれた連句に点を付けて評価する作業を言う。世上の俳諧を非難しないことではない。

注4 白石悌三『日本古典文学大事典』『幻住庵記』（岩波書店刊）は、叙事四段の後に議論一段を以て一文を結ぶ「記」の書式で書かれたと指摘する点を踏まえてこのように記述した。ただし、「叙事部」の四段構成が「記」の書式の普遍的要件とは限らない。

注5 ここに言う「幻住庵記」第四稿の真蹟一本は『芭蕉全図譜』（岩波書店刊）に収録されている。

注6 ここに言う「幻住庵記」第五稿の真蹟一本は『芭蕉全図譜』（岩波書店刊）に収録されている。

注7 「その原稿（『芭蕉全図譜』作品番号245）を京都の去来に送って意見を求め、その返答を得て前稿を大幅に改稿して成稿に達した」（『芭蕉全図譜』解説編140頁）という。ただし現存する二本の第四稿、『芭蕉全図譜』作品番号244、245は去来に送付された原稿に近似するが、同一ではない。結びの語

句を検討する際に応酬された文言を参照すると、現存する二本の末尾には「筆」の字を挿入して補訂したという芭蕉の返答に相当する叙述が無い点がある根拠である。

注8 同じく定稿系とされる「髯顔に足をなげ出し、空山に虱をひねつて座ス」（幻住庵記247）とあり、「髯顔・空山」の語句があるテキストは成稿系に限られる。

注9 「我が聞きしらぬ農談、日既に山の端にかゝれば」（定稿系、幻住庵記247）の語句があるテキストは成稿系に限られる。

注10 もう一本の定稿本247には「賢愚文質のひとつからざるも、いづれか幻のすみなならずやとおもひ捨てふしぬ。」（幻住庵記247）とあり、同じく「筆」の一字を挿入した痕跡は無い。

注11 この訳文は『全釈芭蕉書簡集』（田中善信著、新典社刊）295頁による。